

樹幹からの情報

1. キノカワガ



キノカワガ

昆虫は冬でも活動するものがありますが、大部分は休眠です。寒さの時期を卵、幼虫、蛹(さなぎ)、成虫、どの形態で休眠するかは種によって様々ですが、キノカワガは成虫で越冬するガの仲間です。「樹の皮の蛾(が)」という名前が示すように樹の皮にそっくりなガで、樹の幹や地衣類の着いた石などに止まって冬を乗り切ります。

翅の色彩から凹凸、質感まで樹肌にそっくりです。しかも白っぽいものから黒っぽいものまで色彩と模様にかかなりの変異があるのですが、自分と同じ感じの樹幹に止まっているため、見つけるには目の慣れを必要とします。

自分の模様や色を知った上で樹を選んでいるとしか思えません。まさに森の忍者です。少し離れた場所から撮った写真では、どこにいるかわからないでしょう。

幼虫はカキの葉を食べ、黄色い舟形の繭(まゆ)を作り、夏と秋に成虫が羽化するのですが、秋の成虫は冬を越して春も活動します。打吹山のカキは長谷の周辺と峠の展望台北側その他散在するのですが、成虫には鎮霊神社周辺でもかなり出会います。

冬眠中の白っぽい
キノカワガ冬眠中の黒っぽい
キノカワガ

2. 樹肌

冬は落葉によって林内が明るくなり、樹幹が目立つようになります。葉がなくても樹種を見分けるためには、樹皮の割れ目など、幹の様子が役立ちます。種によって特徴があるからです。

写真のように幹の横断面をみると、内側の木部と樹皮が区別できます。境界面が形成層(写真の→の部分)とよばれ、内部に材、外側に樹皮を形づくっていきます。樹皮は死んだ細胞であるコルク層からできていて、病害虫の侵入や水分の蒸発を防ぎ、幹の肥大とともに外周が大きくなって周囲長が足りなくなります。そのため亀裂が入るものも多く、また剥がれ落ちていくこととなります。このときの細胞接着の強弱分布により、樹種ごとに特徴をもった樹肌になるのです。また、樹齢によっても割れ目、剥がれ方が変わります。



幹の断面・形成層

新しくできる樹皮は薄いのですが、マツのように年数を経ると厚い樹皮となるものや、ナツツバキのように毎年剥がれ落ちているものがあります。絶えず剥離しているものではコケや地衣類が付着できず、また異なる幹肌を呈します。

樹皮で樹種が分かるようになると、観察が一層楽しくなると思います。



クリの樹肌



イヌシデの樹肌



タブノキの樹肌